

## 実践レポート

# 立命館大学の内部質保証における「長所」の特徴

— 自己点検・評価報告書のテキストマイニング分析を通して —

大 田 桂一郎

### 要 旨

本実践レポートでは、第3期機関別認証評価を初年度に受審し、内部質保証の章において、長所が付された立命館大学の自己点検・評価報告書（第2章 内部質保証）を分析する。テキスト型（文章型）データを統計的に分析するためのフリーソフトウェア「KHcoder」を使用し、テキストマイニング（頻出語の単純集計、共起ネットワーク）を行った。その結果、立命館大学の内部質保証は、大別して、全学、教育プログラム（学部・研究科等）、授業の3つの側面におけるPDCAサイクルが有機的に結び合うような形で展開していることから「学部」や「研究科」の取組み、「全学」の「組織」的なつながりを意識した記述であり、「教育研究」や「学生」、「教学」、部会組織で唯一「教学部会」が上位の頻出語として挙げられていることから、教学分野における内部質保証が組織的に推進されている体系にあることが見受けられた。

### キーワード

自己点検・評価、内部質保証、KHcoder、テキストマイニング

## 1. 問題設定

2018年度より大学基準協会における第3期の認証評価のサイクルがはじまった。第2期の認証評価よりも一層、内部質保証が重視される方針が提示され、その重要性について工藤（2017）では、第3期認証評価においては、内部質保証の起点となる三つの方針を一体的に明確化し、こうした方針に則した学位プログラムを体系的に構築することが内部質保証の基盤となること、こうした学位プログラムを適切に管理・運用し、学生の学習成果の向上を目指すことが、内部質保証にとって極めて重要であるとの理解に立って評価することとなった。第3期認証評価では、内部質保証システムは全学的に誰が（どの組織が）責任を持って運営しているか、そのシステムは有効に機能しているか、そのシステムが恒常的・継続的なプロセスとして学内に定着しているかなど、内部質保証の実質化をより一層重視する評価へ踏み出すこととなった、と述べられている。立命館大学においても、内部質保証のための全学的な方針「立命館大学内部質保証方針」を定め、基本的な考え方を以下の5つに整理した。

- 1) 本学の理念・目的、教育目標および各種方針の実現に向けて、教育研究をはじめとする大学の諸活動について自ら点検・評価を行い、その結果を踏まえて、質の向上に向けた恒常的な改善・改革を推進する。
- 2) 全学における内部質保証の推進に責任を負う組織は、自己評価委員会とする。全学の委員会、分野ごとの部会、学部・研究科の3階層からなる体制を構築し、全学の委員会には全学的観点からの自己点検・評価を行う幹事会を置き、また事務局として大学評価室を置く。
- 3) 自己点検・評価による改善を検証するため、学長の諮問機関として大学評価委員会を置く。また、学部・研究科の外部評価として専門分野別外部評価を実施する。
- 4) 自己点検・評価結果、外部評価結果について、社会的公表を行う。
- 5) 質保証について、組織内の理解を促し、組織文化として定着を図る。

さらに、内部質保証を担う組織を図1のように体制を整えている。各部会からの自己点検・評価（学部・研究科は教学部会を経て）は、幹事会を経て、自己評価委員会に上程される。全学の自己点検・評価の結果は学長への報告の後、学長より改善が求められることによって、自己評価委員会や各部会の次年度の取組みへ着実に反映される仕組みを構築している。

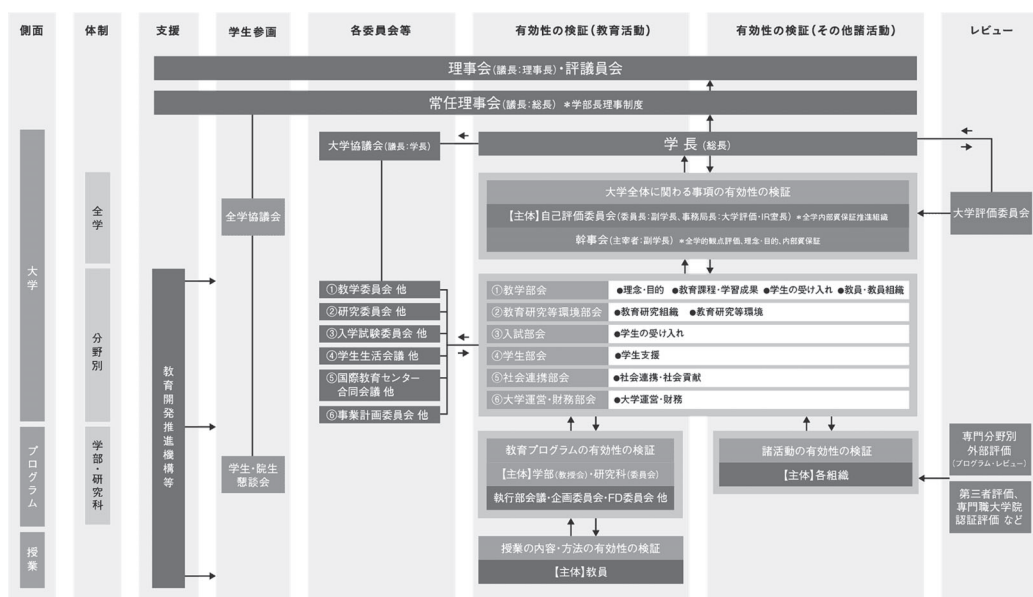


図1 立命館大学における内部質保証組織関係図<sup>1)</sup>

第3期認証評価の初年度である2018年度は、27大学が受審し、適合：25大学、保留：2大学という結果となっている<sup>2)</sup>。重要視されることとなった内部質保証については、2019年度の大学評価実務説明会<sup>3)</sup>での事例紹介がなされたように、各大学において、内部質保証を推進すべく、様々な取組みや組織体制が検討されている。

立命館大学においては、上記の取組みが評価され、第3期認証評価を初年度に受審した27大

学のうち、唯一第2章内部質保証において「長所」<sup>4)</sup>の提言が付された。そこに至るまでは、各役職者等による自己点検・評価報告書の執筆、事務担当者による根拠資料の確認・収集は膨大な業務があった。筆者自身、自己点検・評価の教学部門の事務担当として、主に「第1章 理念・目的」、「第4章 教育課程・学習成果」、「第6章 教員・教員組織」を担った。

本実践レポートにおいては、立命館大学における自己点検・評価報告書（第2章 内部質保証）から、「長所」を提言するに至った特徴や要因を分析することで、どのような要因が「長所」に至ったのか考察し、その結果から、今後の自己点検・評価報告書の執筆活動の一助になればと考え、実践的にテキスト分析を試みる。

## 2. 方法

立命館大学の自己点検・評価報告書（第2章 内部質保証）を、KHcoder を用いて分析する。第2章内部質保証は、表1の構成で記述されている。

表1 立命館大学自己点検・評価報告書（第2章 内部質保証）の構成

大項目	中項目	小項目
(1) 現状の説明	点検・評価項目①：内部質保証のための全学的な方針および手続きを明示しているか。	<内部質保証のための全学的な方針および手続きの設定とその明示>
	点検・評価項目②：内部質保証の推進に責任を負う全学的な体制を整備しているか。	<全学内部質保証推進組織の整備> <全学内部質保証推進組織のメンバー構成の適切性>
	点検・評価項目③：方針および手続きに基づき、内部質保証システムは有効に機能しているか。	<3つのポリシー策定のための全学としての基本的考え方の設定> <内部質保証推進組織による学部・研究科等のPDCAサイクルを機能させる取り組み> <認証評価機関、行政機関等からの指摘事項に対する適切な対応> <点検・評価における客観性、妥当性の確保>
	点検・評価項目④：教育研究活動、自己点検・評価結果、財務、その他の諸活動の状況等を適切に公表し、社会に対する説明責任を果たしているか。	<情報の公表（一般）> <教育研究活動の状況の公開> <自己点検・評価結果の公表> <財務状況の公表> <外国語による情報公表> <公表情報の正確性、信頼性の確保> <公表情報の適切な更新の実施>
	点検・評価項目⑤：内部質保証システムの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。	<全学的なPDCAサイクルの適切性、有効性> <内部質保証システムの点検・評価> <点検・評価結果に基づく改善・向上>
(2) 長所・特色	—	—
(3) 問題点	—	—

立命館大学大学評価・IR室HPで公開されている自己点検・評価報告書（第2章 内部質保証）のPDFデータをテキストデータに変換の上、頻出語の度数を集計する単純集計<sup>5)</sup>を行い、

「TermExtract」<sup>6)</sup>にて複合語を整理し、再度単純集計を行った。その後、頻出語の抽出と「共起ネットワーク」<sup>7)</sup>を作成し、それらを踏まえて考察を行うこととした。なお、当該報告書は、大学基準協会に提出した書類であり、表現や記述などが校正作業を通して整えられていることから、コーディングルール<sup>8)</sup>は設けずに実施することとした。

### 3. 結果と省察

立命館大学の自己点検・評価報告書（第2章 内部質保証）のテキスト分析を行った結果、総抽出語数は7,861語で、出現回数が3回以上の語は259語であった。上位150位の頻出語と出現回数は表2の通りである。

この間の取組みにおいて、内部質保証を推進すべく整備した、「自己評価委員会」や「学長からの改善実施要求」、「内部質保証」、学部・研究科の単年度の自己点検・評価報告書の役割を果たしている「教学総括」や「次年度計画概要」に注目して考察を行っていく。

表2 立命館大学の自己点検・評価報告書（第2章 内部質保証）の頻出語と出現回数

抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数
学部	56 質保証	14 特に	10 計画	7 領域	6				
研究科	46 運用	13 2016年度	9 大学運営	7 枠組み	6				
自己点検・評価	45 確保	13 確認	9 定める	7 それぞれ	5				
行う	44 教育	13 観点	9 明確化	7 アプローチ	5				
本学	42 指摘事項	13 機能	9 2014年度	6 ミドル	5				
自己評価委員会	40 次年度計画概要	13 教育プログラム	9 2017年度	6 運営	5				
内部質保証システム	40 対応	13 教学改革	9 ガイドライン	6 応じる	5				
結果	38 大学評価委員会	13 実行	9 システム	6 開講方針	5				
改善	37 展開	13 授業	9 改正	6 開催	5				
全学	34 報告	13 情報公開	9 基本	6 幹事会	5				
点検	31 目的	13 報告書	9 客観性	6 基本方針	5				
検証	26 課題	12 毎年	9 求める	6 規模	5				
内部質保証	26 活用	12 アップ	8 教育目標	6 共有	5				
大学	25 資料2-2	12 カリキュラム	8 教学ガイドライン	6 教育活動	5				
教育研究	24 進める	12 改善状況	8 形	6 検討	5				
評価	24 踏まえる	12 教学委員会	8 見直し	6 構成	5				
推進	23 関わる	11 教学機関	8 資料2-4	6 作成	5				
情報	22 教学総括	11 月	8 事項	6 視点	5				
組織	22 経る	11 向上	8 自律	6 資料2-5	5				
公表	21 公開	11 策定	8 社会連携	6 示す	5				
基づく	20 受ける	11 資料2-3	8 取り組む	6 社会	5				
向ける	18 図る	11 実現	8 照らす	6 信頼性	5				
仕組み	18 適切性	11 実践	8 状況	6 制度化	5				
取り組み	18 年	11 妥当性	8 精査	6 整理	5				
学生	17 必要	11 置く	8 全学協議会	6 正確性	5				
活動	17 方針	11 反映	8 全学的観点	6 責任	5				
PDCAサイクル	16 教学部会	10 カリキュラム改革	7 側面	6 専門分野別外部評価	5				
学長	15 具体	10 ポリシー	7 体制	6 組織構造	5				
実施	15 財務	10 外部評価	7 適切	6 大学院教学委員会	5				
教学	14 整備	10 環境	7 部会	6 着実	5				

表2で示した頻出語から、立命館大学の自己点検・評価報告書（第2章 内部質保証）には、「学部」、「研究科」、立命館大学において全学部・研究科を示す「全学」、内部質保証を推進する「自己評価委員会」、「内部質保証システム」や「改善」、「点検」、「検証」等、自己点検・評価やPDCAサイクルを意識した語や「組織」、「公表」、「推進」なども多く頻出している。立命館大学の内部質保証は、大別して、全学、教育プログラム（学部・研究科等）、授業の3つの側面におけるPDCAサイクルが有機的に結び合うような形で展開していることから「学部」や「研究科」の取組みと「全学」の「組織」を意識した記述であることが推測できる。また、内部質保証方針に則し、内部質保証を推進する組織である「自己評価委員会」が頻出していること、「改善」や「推進」が多いことから「自己評価委員会」を中心とした「内部質保証システム」の「組織」体系の中で、「改善」や「点検」、「検証」を「推進」していると解釈することができる。また、「教育研究」や「学生」、「教学」、部会組織で唯一「教学部会」が挙げられていることから、「教学部会」が内部質保証において重要な役割を果たしていることが伺える。

図2は、教育に焦点を当てた内部質保証システム体系図である。

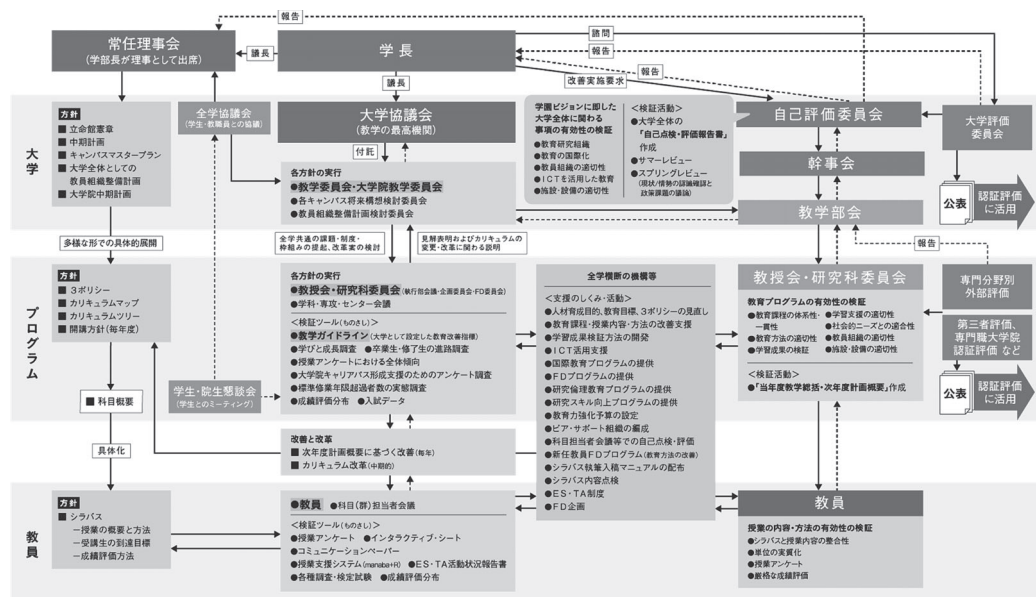


図2 教育に焦点を当てた内部質保証システム体系図<sup>9)</sup>

教学分野における内部質保証は、学長－自己評価委員会－教学部会－学部・研究科－教員という組織構造になっており、教学ガイドラインをはじめとした、全学的な枠組みのもとで、各学部・研究科が自律的に教学や評価の運営に取組む、そのような組織的な運用部分を記述していることが頻出語からも伺える。

次に、出現語の共起ネットワーク<sup>7)</sup>を図3に示す。



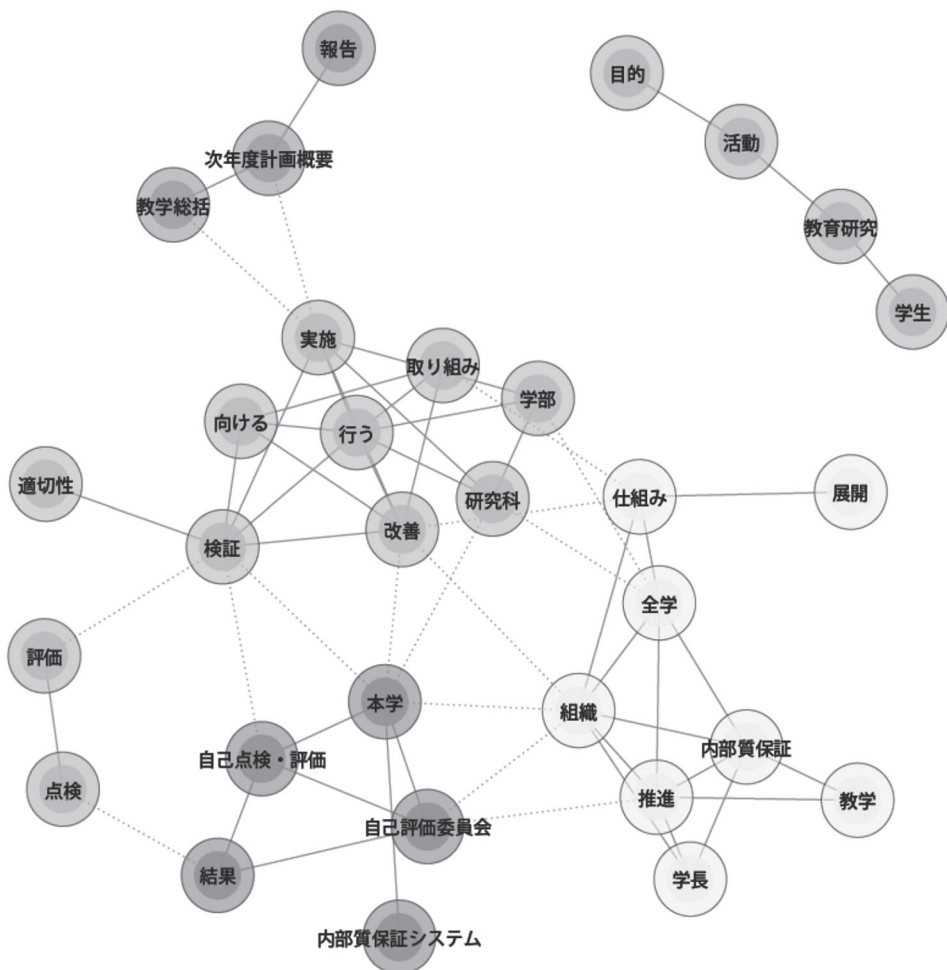


図3 立命館大学の自己点検・評価報告書（第2章内部質保証）の共起ネットワーク

この章の冒頭で触れたように、「自己評価委員会」や「学長からの改善実施要求」、学部・研究科の単年度の自己点検・評価報告書の役割を果たしている「教学総括」や「次年度計画概要」に着目する。

「自己評価委員会」は「内部質保証システム」や「自己点検・評価」、「本学」といった組織的なワードとのつながりが強いことが分かる。「内部質保証」については、「推進」や「教学」、「組織」や「仕組み」というワードとの連関が強いことが分かる。大学評価結果で長所として提言付された内容（表3）との関連を確認すると、「全学的な内部質保証の推進組織である「自己評価委員会とそのもとに設けた6つの部会（教学、教育研究等環境、入試、学生、社会連携、大学運営・財務）、学部・研究科の3階層と各委員会が連携した内部質保証体制を構築し、従来から実施していた各学部・研究科等の自己点検・評価である「教学総括・次年度計画概要」の結果に基づく全学的な評価及び改善策の提示を行い、改善につなげている」と評価されており、共起関係の解釈としても、学部・研究科の3階層と各委員会が連携した内部質保証体制を構築しているこ

とが影響しているものと解釈ができる。「学部」や「研究科」が取組みを行い、その適切性を検証するという構造がこの結果から分かる。

しかしながら、「学部」や「研究科」が取組みを行い、その適切性を検証し作成する「教学総括」や「次年度計画概要」というワードが「内部質保証」や「自己評価委員会」からは距離がある。「内部質保証」を体系的に推進している構造は、頻出語や共起ネットワークの解釈からも伺えるが、実際の中身（各機関・組織がどのように取組んでいるか、その取組みがどのように内部質保証システムに連携しているかなど）は、記述箇所の問題（第4章 教育過程・学習成果で記載されているため）なのか、この共起ネットワークからは伺うことはできない。各機関・部会・組織が内部質保証体系の中でどのような連携をし、相乗効果を生み出しているかは、非常に重要な論点である。同時に、「学生」や「教育研究」なども「内部質保証」というワードからは距離があり、表3の長所の中でも「学生による参画を制度化することで客観性を担保している」と評価がされているため、その取組みや内部質保証システムとの有機的連携については、検証の余地があると考えられる。

表3 立命館大学に対する大学評価（認証評価）結果 第2章 内部質保証における長所<sup>10)</sup>

長所	<p>「立命館大学内部質保証方針」に基づき、全学的な内部質保証の推進組織である「自己評価委員会」とそのもとに設けた6つの部会（教学、教育研究等環境、入試、学生、社会連携、大学運営・財務）、学部・研究科の3階層と各委員会が連携した内部質保証体制を構築し、従来から実施していた各学部・研究科等の自己点検・評価である「教学総括・次年度計画概要」の結果に基づく全学的な評価及び改善策の提示を行い、改善につなげている。</p> <p>その際には、「教学ガイドライン」等を活用して各学部・研究科への教学マネジメントを行い、教育の質保証につなげている。さらに、各学部・研究科では専門分野別外部評価を実施し、外部有識者からなる「大学評価委員会」が内部質保証システムの適切性を評価するとともに、学生による参画を制度化することで客観性を担保している。このように、従来からの活動を生かして内部質保証システムを構築し、恒常的・継続的に教育研究等の質保証に取り組んでいることは評価できる。</p>
----	---

#### 4. まとめ

表2からは、「学部」、「研究科」、立命館大学において全学部・研究科を示す「全学」、内部質保証を推進する「自己評価委員会」、「内部質保証システム」や「改善」、「点検」、「検証」等、自己点検・評価やPDCAサイクルを意識した語や「組織」、「公表」、「推進」なども多く頻出しており、大別して、全学、教育プログラム（学部・研究科等）、授業の3つの側面におけるPDCAサイクルが有機的に結び合うような形で展開していることから「学部」や「研究科」の取組みと「全学」の「組織」的なつながりを意識した記述であることが伺える。また、「教育研究」や「学生」、「教学」、部会組織で唯一「教学部会」が挙げられていることから、が内部質保証において重要な役割を果たしていることが伺える。

しかしながら、図3からは、「自己評価委員会」は「内部質保証システム」や「自己点検・評価」、「本学」といった組織的なワードとのつながりが強いことや、「内部質保証」については、「推進」や「教学」、「組織」や「仕組み」というワードとの連関が強いことから長所が付されたことが解釈できるが、「学部」や「研究科」が取組みを行い、その適切性を検証し作成する「教学総括」

や「次年度計画概要」というワードが「内部質保証」や「自己評価委員会」からは一定の距離がある。「内部質保証」を体系的に推進している構造は、表2や図3の解釈からも伺えるが、実際の中身（各機関・組織がどのように取り組んでいるか、その取り組みがどのように内部質保証システムに連携しているかなど）は伺えず、各機関・部会・組織が内部質保証体系の中でどのような連携をし、相乗効果を生み出しているかは、検討課題である。

さらに、「学生」や「教育研究」なども「内部質保証」というワードからは距離があり、表3の長所の中でも「学生による参画を制度化することで客観性を担保している」と評価がされているため、その取り組みや内部質保証システムとの有機的連携については、検証の余地があると考えられる。

## 5. おわりに

今回の分析はあくまで、報告書のテキストを対象としたに過ぎない。特に、上述した課題は、記述されているテキストに問題があるのか、実際の仕組みに問題があるのか、それらを切り分けることはできない。また、この結果のみが、評価に結びつくものでなく、テキストや報告書を整えるだけでは、内部質保証の推進には寄与しないだろう。

立命館大学においては、第3期機関別認証評価において、長所が7つ、改善課題が3つで『適合』という結果であった。2018年度においては、以後の7年間の中期方針を議論し、自己評価委員会において議決した。現行の体制を継承した上で、全学内部質保証推進組織と位置づけた自己評価委員会を中心に、幹事会、部会を通して、学部・研究科、各組織の自己点検・評価を行い、内部質保証の推進をはかることとしている。その基本的設計として、モニタリング（毎年度行うデータ収集等による効率的な点検・評価）とレビュー（モニタリングによって得られたデータや点検・評価結果等を踏まえた総合的な点検・評価）の連携による効果的な自己点検・評価により、内部質保証を推進するとしている。引き続き、立命館大学の歴史や特色を踏まえた教育研究の質について、国際標準を目指して高めていくという「立命館憲章」の理念の下、その実現に向けて日々努力を重ねていきたい。

## 謝辞

立命館大学教育開発推進機構教育・学修支援センター河井亨先生には本実践レポート作成における貴重なご意見・ご支援を賜りました。また、立命館大学教学部教務課の皆様、ならびに立命館大学総合企画部事業計画課の皆様にもご意見を賜りました。心より御礼申し上げます。

## 注

- 1) 立命館大学における内部質保証組織関係図 <http://www.ritsumei.ac.jp/assessment/about.html/>（最終閲覧日 2019 年 10 月 3 日）
- 2) 大学基準協会 HP「評価結果検索」のページ（<https://www.juaa.or.jp/search/index.php>）より評価実施年度を 2018、評価種別を大学評価に設定、検索結果を筆者が集計。（2019 年 8 月 28 日最終閲覧）
- 3) 大学基準協会が評価を受審する大学向けに行う説明会



- 4) 大学基準協会による評価の提言の一つ。長所は、① 当該大学の掲げる理念・目的の実現に資する事項であり、有意な成果が見られる（期待できる）もの、または② わが国の高等教育において先駆性又は独自性のある事項であり、有意な成果が見られる（期待できる）ものに提言がなされる
- 5) 頻出語の頻出回数を集計したもの
- 6) テキストデータから、複合語や専門用語を取り出すための Perl モジュール
- 7) 文書からその文書の特徴づける語の抽出を行い、特徴語同士の共起関係をネットワーク図にしたもの
- 8) 語の条件指定。例えば、「人の死」という語に「亡くなる」、「死ぬ」、「殉死」などの意味を含めるよう分析上のルールを設定できる
- 9) 教育に焦点を当てた内部質保証システム体系図 <http://www.ritsumei.ac.jp/assessment/about.html/>（最終閲覧日 2019 年 10 月 3 日）
- 10) 立命館大学に対する大学評価（認証評価）結果より抜粋  
<http://www.ritsumei.ac.jp/file.jsp?id=228915&f=.pdf>（2019 年 8 月 28 日最終閲覧）

## 参考文献

- 樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—』ナカニシヤ出版  
2014 年
- 工藤潤「第 3 期認証評価における大学評価について—大学基準協会が目指す内部質保証—」『大学時報』  
第 372 号、2017 年 1 月、98-109 頁
- 公益財団法人大学基準協会「大学評価システムの概要と大学基準協会が求める内部質保証システムについて」2019（平成 31）年度大学評価実務説明会
- 立命館大学「2018 年度自己点検・評価報告書」  
<http://www.ritsumei.ac.jp/file.jsp?id=415009&f=.pdf>（2019 年 8 月 28 日最終閲覧）
- 立命館大学「立命館大学に対する大学評価（認証評価）結果」  
<http://www.ritsumei.ac.jp/file.jsp?id=228915&f=.pdf>（2019 年 8 月 28 日最終閲覧）
- 立命館大学「大学評価・IR 室 HP」  
<http://www.ritsumei.ac.jp/assessment/about.html/>（2019 年 8 月 28 日最終閲覧）
- 立命館大学「大学評価・IR 室 HP 本学の内部質保証」  
<http://www.ritsumei.ac.jp/assessment/about.html/>（2019 年 8 月 28 日最終閲覧）
- 立命館大学「立命館大学内部質保証方針」  
<http://www.ritsumei.ac.jp/file.jsp?id=371226&f=.pdf>（2019 年 8 月 28 日最終閲覧）
- 大学基準協会「評価結果検索ページ」  
<https://www.juaa.or.jp/search/index.php>（2019 年 8 月 28 日最終閲覧）

Analysis of self-check and assessment report (Chapter II Internal Quality Assurance):  
Practice of text mining using KHcoder

OTA Keiichiro (Administrator, Office of Academic Affairs Ritsumeikan University)

**Abstract**

In this practical report, the 2<sup>nd</sup> chapter of the self-check and assessment report of Ritsumeikan University, which received positive evaluation as to in-college quality assurance in the first-year's Third University Accreditation, is text-mined using the free software "KHcoder" designed for statistical analysis of sentence-type text format (simple counting of words frequently appeared, networking co-related words) data, and the results of text-mining is publicized.

This analysis has indicated that Ritsumeikan University's internal quality assurance report pays close attention to educational practices of each "college" and "graduate college" and "campus-wide" "systematic" links on the ground that its internal quality assurance system is particularly developed so that PDCA cycles of the whole university, educational programs (for colleges and graduate colleges) and classes are organically co-related. It has also be observed that its internal quality assurance system is systematically promoted in teaching and learning programs from the fact that "educational research", "students, and "teaching and learning," and "meetings to promote teaching and learning" among other meetings are words frequently used.

**Keywords**

Self-check / assessment, internal quality assurance, KHcoder, Text mining